

アムロ AMLO政権が到来したメキシコ

伊 高 浩 昭

以下は2018年10月20日の伊高浩昭氏による講演「トラテロルコ虐殺事件半世紀——メキシコ政治の変遷」を同講師がまとめたものである。

50年前の1968年、今より50歳若かった私は、駆け出し記者として2年目の日々をメキシコで送っていました。その前年に私はメキシコに行ったのですが、ラテンアメリカ（ラ米）全域を取材する記者になろうと志していました。そのためジャーナリズムコースに身を置いていた学生時代に第2外国語としてスペイン語、第3外国語でポルトガル語を学んでいました。メキシコ生活2年目の68年にメキシコ五輪がありました。64年の東京五輪の次の五輪の開催国とあって、日本人のメキシコへの関心は強く、日本のジャーナリズムの中心にあるマスメディアはメキシコ市に「五輪支局」を相次いで設け、67年のプレ五輪大会を含む予備取材に励んでいました。

因みに、プレ五輪の直前に飛び込んできたのが、ボリビアでのチェ・ゲバラの処刑でした。私はK通信社のメキシコ通信員（常駐記者）の資格を得て、本社運動部記者を中心とする特派員団の世話をしながら、メキシコとラ米の情勢に目配りしていました。このプレ五輪取材を経験していたため、本番のメキシコ五輪取材には余裕を持って臨むことができました。

メキシコで取材する外国メディア記者は、内務省外国報道局で出入国自由の取材査証を取得し、これを半年ごとに更新しながら職務を果たします。この公認記者証がないと取材は非合法となり、国外退去処分に遭うことになります。日本新聞協会発行の日英西仏中露語などで書かれた記者証と、メキシコ内務省取材査証を持った私は、メキシコ入国の日から、飢えた野良犬のように彷徨い歩く「犬棒取材」（犬も歩けば棒に当たる）を展開していました。

▼PRI体制

私の愛読書の一つに、米国人記者エドゥガー・スノウ（1905～72）の『目覚めへの旅』という自伝があります。スノウは中国革命の指導部に食い込み歴大な報道文を書いたジャーナリストですが、若い頃の思いとして「フリーランサーと言えば聞こえは良いが、記事を発表する場を持たないジャーナリストは乞食同然だ」と書いています。筆一本で身を立ようと決意したならば、食えない日々が来ることも覚悟しなければならないと、私は肝に銘じたものです。しかし、志さ

えあれば、若さが全てを解決してくれます。費やすべき時間が若者には無限にあるからです。

話を戻しますが、ある時、国会議員の選挙運動の現場を取材しました。当時の政権党PRI（制度的革命党）の候補が広場で演説し、動員された群衆が広場を埋めていました。東洋人で目立つ私は、すぐに私服を着た党の監視員たちに見つかって、「あなたの来る場ではない」と言われ、強引に広場の外に連れ出されました。「私はあなたの政府が発行した記者証を持っています。取材の自由は保障されているはずですよ」と抵抗しましたが、彼らは聴く耳を持たず、私は締め出されました。大変に封建的な弾圧であり、一体これは何なんだろうと思いました。私はそういう目に遭い続けるうちに、メキシコの言論・報道状況がよく理解できるようになりました。

メキシコには、19世紀から続いていたポルフィリオ・ディアス大統領の開発独裁政権打倒のため1910年に「メキシコ革命」が起きました。50万人近い死者を出し、1917年の新憲法制定で収束に向かったのですが、この革命を「憲政下で平和裡に制度化して継続遂行する政党」と自称するのがPRIです。

革命の成果として憲法には農地改革、政教分離、教会資産没収、大統領一人一期・再選不可制、教育改革、外国人の権利制限などが盛り込まれ、当時としては世界で最も進歩的な憲法と称讃されました。スペイン植民地時代300年の悪しき遺制を可能な限り取り払うべく制定された憲法でした。私はその1917年憲法の50周年である1967年に、奇しくもメキシコに住み着いたのです。

▼ヴェトナム反戦デモ

さまざまな不愉快な経験を積んでいた私でしたが、年が明けた1968年の4月25日のこと、初めて心が躍る政治的取材をすることができました。その日、突如として、大きなデモ行進がメキシコ市の目抜き通りで展開されたのです。あれ？と思いました。前日まで首都では、大規模なデモなど政治的精神や思想の自由な発露に遭遇する機会がありませんでした。私は初めて眼前に繰り広げられた光景を見て驚いたのです。

このデモは、メキシコ市当局が許可したヴェトナム反戦デモでした。当時、世界中でヴェトナム反戦デモが展開されていました。それがメキシコに到達したわけです。1968年はヴェトナム戦争が最も激しい時期で、ヴェトナム人の死者は歴大な数に及んでいました。

「反共十字軍」役をもって任じる米軍の死者は桁違いに少ないのですが、それなりに増えていました。米国内では1964、65年ごろから、反戦運動が始まっていました。自分たちの息子、兄弟、父親たちが殺されている、この戦争は止めなければならない、と立ち上がった市民が行動を起こしたのです。

反共主義に立ち、日本や復帰前の沖縄を出撃基地にして戦争を遂行していた米国の足元から反戦運動が起こったのです。その中心がカリフォルニア大学のパークレー校でした。当時はヒッピー文化の時代でした。長髪、ジーンズ、マリウアナ（大麻）、反戦歌、性の解放、女権拡張運動の隆盛期でした。パークレーから全米に拡がり、全世界に波及しました。ボブ・ディラン、ジョン・バエズ、ビートルズらの歌も一役買っていました。このように文化・文明の新しいパラダイム（展開する次元）がヴェトナム反戦を中心にして回転していたのです。

日本では小田実、鶴見俊輔ら「進歩的知識人」と呼ばれる人々が「ベ平連」を組織し、ヴェトナム反戦運動を果敢に展開していました。反戦米兵を日本で匿い、安全な地に亡命させる活動も

していました。当時の国際的、全世界的共通項がヴェトナム反戦だったのです。それをしないと、時流から外れているという感覚もあったでしょう。

このメキシコ人が滔々と大通りを流れる反戦デモは、メキシコ政府に反対する目的でないため許可されていたのです。何キロも続く、何万人参加しているか数えようのない大デモです。人海の流れは洪水のようでもありました。

「ホ・ホ・ホーチミン、チェ・チェ・チェ・ゲバラ」。縦長の大群衆は、そう繰り返し叫びながら前進します。米軍と戦う北ヴェトナムのホーチミン大統領（1890～1969）と、前年死んだ革命家ゲバラの東西の両雄が抵抗のスローガンでした。

私は大海の藻くず、一人で全体像を掴もうと取材するのですが、それはもちろん不可能です。先頭に立って、行進を指揮する指導者集団の言動を把握するのが精いっぱいです。行進の先頭部分に紛れ込んで、お手透きのリーダーと話しながら進んでいくわけです。他のリーダーらは拡声器を掲げてアジっています。隊列が乱れないように規律を維持する指導者も居ます。

▼ラ米塔でのインタビュー

「ここでは言えない、秘密警察がいっぱいいるからね。きみも見張られてるはずだぞ」。話しかけるや、そう返した指導者は、「これから指定する時間に、この先の角にあるラテンアメリカ塔の展望台で会おう」と応じてくれました。私より4、5歳若い20歳前後の青年でした。

ラ米塔は、当時のメキシコで一番高い、細く美しいビルです。エンパイアーステイトビルの小型メキシコ版といったところ。このビルは今も健在ですが、そこの展望台で会うことになったのです。約束した時刻に展望台へ行くと、彼も間もなくやってきました。

「この反戦デモの実態は反政府デモなのだ。長い間、メキシコを支配してきた封建的なPRI一党独裁に対する反逆の意思表示だ。これを忘れないでほしい」。彼は、そう強調しました。私は、生きた取材をする喜びに鳥肌が立ちました。

展望台からは四方に、メキシコ市の拡がり、その果ての外輪山、相次ぐ埋め立てで小さくなっていくテスココ湖などが見えました。眼下には車がひしめく賑やかな中心街、外輪山の彼方には薄煙をたなびかせる5,000メートル級のポポカテペトル火山、隣のイスタクシウアトル火山が雄大な姿を見せています。当時もスモッグはひどかったのですが、陽光と強風さえあれば、遠方が見えたのです。中心街の先にはスラム街がありました。

「見ろ、この貧困、この矛盾。政府は解決できない、俺たちがやるんだ」。彼の言い分は理解できましたが、大言壮語ではないか、と思いました。しかしこの日は忘れられない日になりました。メキシコに滞在して1年あまり経って初めて、この国の政治的素顔の片鱗を見たかと思えたからです。こんな取材が連日のようにできるようになったとき、メキシコは変わるのだなと思いました。それでも、彼らが政府に反逆して世の中を変えていくというのは大言壮語ではないか、と幾分冷ややかに受け止めていたのです。

▼パリ五月革命

皆さん、ここで思いつくのはフランスの「パリ五月革命」ですね。メキシコ市でのヴェトナム反戦デモの3日前の4月22日、パリで大きなヴェトナム反戦デモがありました。これが3日後にメキシコ市に伝染したのです。インターネットや携帯電話はなく、ファクスも性能が悪く、あ

まり使われていなかった時代です。国際電話、国際通信社、新聞、テレビ、ラジオが情報伝達の主力でした。3日でパリの動きが伝播したのは遅くない方でした。

その年3月、パリ大学ソルボンヌ校ナンテール分校で重要な動きがありました。分校のある郊外地域にはアルジェリア人など移民が多く住み、「花の都パリ」とは異なる光景が広がっていました。住民の政府批判が強い地域でした。

この分校の学生指導者や教授らが、反ヴェトナム戦争、反米帝国主義など政治的反逆行動ゆえに逮捕されていた仲間の学生らを釈放せよと運動を起こしていました。彼らは分校長の部屋や会議室を占拠し、闘争戦略を明け方までに練っていました。それが3月22日のことです。この日付から「3・22運動」と呼ばれました。

キューバ革命の原点となったモンカーダ兵営襲撃事件の起きた（1953年）7月26日から、フィデル・カストロの革命運動組織は「7月26日運動」と命名されましたが、ナンテール分校の学生らは、これを真似して「3・22」と名付けたのです。

この闘争の延長線上で4月22日のヴェトナム反戦デモがパリでありました。ヴェトナムはかつてフランス植民地だったこともあり、フランス人にとってアジアでは比較的関心の高い国です。運動の機運はパリ中に、次いで全国へと広がってゆきました。「エスカレート」という用語は、ヴェトナム戦争中、米軍の攻撃の激しさが段階的に増幅してゆくのを形容する言葉として報道に使われ有名になったのですが、運動の規模、地理的広がり、参加者の数と職業、要求も膨らんでいきます。

パリの学生運動には大学教職員組合も賛同し、初期のヴェトナム反戦から大学改革、教育改革へと比重が増してゆきました。初めは一步引いて様子を眺めていた共産党、社会党、両党の影響下の労連など伝統左翼がデモやストに参加すると、反政府色が鮮明になりました。当時はシャルル・ドゴール将軍の政権であり、矛先は反ドゴール体制に向かいました。

第2次世界大戦中、ロンドンに亡命し、反ナチ抵抗運動「自由フランス」の象徴となり、戦後は英雄として政界の大立者になったドゴールですが、彼はナショナリズムを煽り「大国化」を目指し、米国に対抗して核軍備、経済強化などに努めました。大学と大学教育の目的は、「資本主義大国フランス」を一層強く豊かにするための人材、テクノクラートを育成することと切り切っていました。

日本でも当時、「産学協同」が叫ばれていました。産業つまり経済界と大学が一緒になって研究し、それに役立つ人材を育成して、日本の経済・技術を革新しようという資本家中心主義の目論見で、大学生は反対運動を展開していました。私の世代は日韓条約反対と並べ、産学協同にも反対して闘いました。

フランスの大学状況は産学協同では一步進んでいましたから、ドゴールは大学教育の存在意義を資本主義強化に役立つ人材育成だと言って憚らなかったわけです。これに対して、体制に従順でない学生たちが駄目だと叫び、抵抗したのです。

▼社会主義にも絶望

当時の状況は、ネオリベリズム（新自由主義）の弱肉強食政策が明確には政府政策になっていなかったのですが、その方向に向かっていました。貧富格差は年々深刻化していました。フラ

ンスはアルジェリア植民地での独立戦争に手を焼き、残虐な弾圧をしても勝てず、1962年に独立を認めざるを得なかったのですが、ドゴールが認め見切りを付けました。このためドゴールは極右勢力から命を狙われました。その実話を基に書かれた小説が、フレデリック・フォーサイスの『ジャッカルの日』です。

フランスにはアルジェリア人などアフリカ大陸、さらにはカリブ海、南太平洋にある元植民地や現植民地から来た大勢の移民がいて、その多くは低所得層を形成していました。都市と農村の間にも貧富格差があります。社会的上昇を遂げられなかった貧しい白人も少なくないのです。貧富格差に絶望を感じていた若者世代が立ち上がったわけです。

一方、社会主義陣営では、スターリン死後もスターリン主義が生きていました。共産党政権は貧しいプロレタリア、底辺労働者のためにブルジョア、富裕層支配を倒して新しい希望に満ちた世界を創るのだと言いながら、少数エリートが政権を握り、上意下達の「民主集中」制を敷いていました。これを「社会主義型民主主義」と呼び、「資本主義型民主主義」と対抗したのです。若者は、どちらも茶番だと扱き下ろしていました。

ポーランドとハンガリーでは共産党強権支配に反対する人民が立ち上がり、弾圧されました。「パリ五月革命」後の1968年8月にはチェコスロヴァキアにソ連軍戦車部隊が侵攻し、「プラハの春」と呼ばれた民主化機運を蹂躪しました。ですからフランスの学生は、自分の国の資本主義を糾弾しながらも同時に、地続きの欧州東部にあったソ連圏諸国をも信用していませんでした。彼らは社会主義も資本主義も駄目だと叫んでいたのです。

▼管理対被管理

フランスの大学生らは、言わば「第3の道」を探っていたのです。資本主義と社会主義に共通するのは、「管理者」と「管理される者」がいることです。管理対被管理という人間関係を破壊し、平等主義を確立するという理想はアナキズムの思想でもあり、それが「パリ五月革命」にもあったのです。

1950年代半ばにジョン・ガルブレイスという有名な米国の経済学者が『ゆたかな社会』という本を書き、ベストセラーになりました。私もこれを学生時代に読みましたが、第2次大戦を経て世界最強大国になった米国は豊かな社会になっていくと説いたのです。生産者の欲望は財である商品を生産する。消費者の欲望は商品を消費するため、生産者の意思に左右される。商品広告、コマーシャルは消費者心理を操ったり煽動したりしますね。今では誰もが気づいている当たり前のことを理論立てて指摘したわけです。

そして生産者と消費者の関係は、管理者と被管理者のそれと一致するわけです。大衆は自分の欲望を全うさせようと新たな大量生産を待つが、その過程で生産者と消費者がある種の合意・和合を図る。一緒に何かをする。つまり、管理者と被管理者が一緒になってしまう。そこに消費者は幸せを感じる。いつの間にか虐げられているはずの被支配者は社会を変える方向に行かないで、支配者に騙され丸め込められる形で、生産者に都合の良い社会をつくる。こういうことにもパリの学生は反対しました。ガルブレイスの『ゆたかな社会』という概念にも反対したわけです。

翻って、発展途上のメキシコはパリとは大きく異なります。しかしメキシコの一部は豊かな資本主義になっていました。その「進んだメキシコ」と、それを取り巻く広大な貧困地域が対照的

ないびつな社会であり、「二つのメキシコ」と呼ばれていました。この状況は現在も続き、一層ひどくなっています。

「パリ五月革命」の学生らには、資本主義と社会主義のいずれも超えようと志す主張がありました。メキシコの若者には、キューバ革命への連帯感が強くありました。カストロ兄弟、チェ・ゲバラらはメキシコから出撃して革命を起こしたのですから、親近感が強い。いろんな意味で、社会主義に対する受け止め方がフランスの若者と違っていました。

フランス革命とメキシコ革命が過去にありました。両者は時代は違いますが、支配構造を変えることを目指した点では同じでした。今日的に言えば、管理対被管理という支配構造の変革ないし破壊です。どうしようもない、天井塞がりの状況を壊して進んでいくという若者の意欲、野心においては仏墨両国の若者は同じでした。

「パリ五月革命」は、ドゴール大統領が軍隊を出動させると脅しつつデモや集会を鎮めていき、打った総選挙でドゴール派が圧勝し、夏期休暇が近づいてきて、6月、尻つぼみに終わりました。しかしフランス政府はヴェトナム戦争に対する考え方を多少改め、大学の予算も増やすなどし、学生らの言い分の一部を呑んだのです。「革命」の呼び名にふさわしい成果はなかったのですが、意識の変化は確かにあったのです。

「私はパリ五月革命の世代だ。あの高揚があったからこそ今も生きているんだ」というような言葉を、私は世界各地で聞いています。パリの学生は闘争中、たくさんの落書きを建物の壁に残しました。傑作は「石畳をはがしたら、そこには砂漠があった」という落書きです。足元は砂漠、ならばパリもメキシコ市も東京も「砂上の楼閣」ではないか、とふと思えたのです。

ともあれフランスの激動が終わった後の7月、メキシコで学生決起が始まったのです。

▼学生層の団結

1968年7月22日、メキシコ市中心部にあった内務省に近い広場で、富裕層の子弟が通う私立高校と、中流以下、貧困層を含む子弟が多い国立工科大学系列の高校（大学予科）の生徒同士が喧嘩を始めました。日頃から仲が悪く、その日も些細な理由で喧嘩し、それが乱闘に発展しました。「プロレタリア」、「ブルジョア」と互いに罵り合いながら殴り合うのです。

ところが今回は様相が異なりました。出動した首都警察機動隊が催涙ガスを発射し、両校の学生は乱闘を止めて逃げ惑いました。報道陣は、ハンカチや手ぬぐいを水で濡らし、それで鼻と口を塞ぎながら取材するのですが、目は催涙ガスにやられます。強烈な刺激臭もあり、目が真っ赤になります。

次の日、23日にも同じ場所で両校の学生が対峙しましたが、機動隊による弾圧を受け、次第に双方は団結し「権力」に対抗するようになってゆきます。学生同士の争いが、学生対権力という構図に変化したのです。私は、3ヶ月前のヴェトナム反戦デモの指導者が、これは反戦の衣を着た反政府デモだと言ったのを思い出していました。もしかすると、彼の言ったのは大言壮語ではなく予告だったのかもしれない、と思い至りました。

高校生同士の抗争に端を発した闘争は、瞬く間に大学に飛び火しました。工科大学系高校は「ボカシオナル」、つまり「才能を見極める段階」というような意味ですが、首都に第1、第2、第3……。と何校もあります。闘争は横に繋がりを、頂点の工科大学（ポリテクニコ）に達します。

また最重要の国立メキシコ自治大学（UNAM）にも多くの「プレパラトリア」校があります。大学入学の準備段階、大学予科であり、日本では高校のようなものです。工科大系や私立校の同世代の若者たちが弾圧されれば、学園の垣根を超越して、たちまち横に繋がります。横の団結は縦に押し上げられ、頂点のUNAM、工科大学、他の国公立大学、私立大学も連帯します。こうした「政治的市民性」は、メキシコ人も優れています。

7月下旬に起きた学生の抗議行動が反政府抵抗運動に発展するのに時間はかかりませんでした。運動はメキシコ市から全国に広がってゆきます。闘争はメキシコ五輪大会が近づくに連れて激化してゆきます。闘争を指揮する学生指導部は、五輪を「人質」として政府に譲歩を迫る戦略を進めていました。これに対し政府は8月中、遅くとも9月半ばまでには学生運動を鎮圧してしまおうと強硬手段に出ます。

首都旧市街中心部にある古いプレパラトリア校は、スペイン植民地期の修道院の建物を改造した学校で、表門の扉は厚さが10センチもある檜の頑丈なものでした。近くにある憲法広場（ソカロ）は大統領政庁（国家宮殿）、メキシコ市庁、メキシコ大聖堂などに囲まれた広大な広場ですが、政府側も市民側も最重要行事は、この広場で執り行います。

学生たちもこのソカロで何度も抗議行動をしていました。ある日、軍隊に追われた学生たちは、このプレパラトリア校に逃げ込み、厚い扉を太い門で閉ざしました。すると軍はバズーカ砲で扉を撃ち破ってしまったのです。歴史的な文化財も、こうして破損してしまいました。

▼体の良い野次馬

私はソカロで取材していたとき、軍隊に追いまくられ逃げ惑う学生ら群衆に巻き込まれ、危うく下敷きになりかけました。このような場では報道陣は必ずしも中立だと認められているわけではありません。とくに夜は誰が誰だか分からなくなりますから、危険度が増します。外国人記者を殺傷すれば国際ニュースになり、対立する当事者の中のある勢力にとっては宣伝価値が出てきますから、記者が意図的に標的にされることがあります。

私は取材中に危険な場から逃れたことが何度もありますが、その度に、ジャーナリストとは体の良い野次馬にすぎないのではないか、と自問したものです。しかし、野次馬根性が人一倍強くなければ務まらないのがジャーナリストです。

挑発し暴動状況をつくり、それを一気に弾圧しようと、闇の中で銃撃、狙撃する輩が必ず出てきます。そこで私と当時の鈴木顕介K通信メキシコ支局長は鉄製のヘルメットを携行していました。投石や流れ弾を警戒してのことです。あるとき車の中にヘルメットを置いて、私たちはUNAMの学生集会を取材しました。まもなく私服の公安に咎められ、「なぜヘルメットを持っているのだ」と詰問されました。駐車場から尾行されていたのでしょう。取材証を見せ説明し、納得してもらいました。

その晩、私の友人の大学生の自宅で宴がありました。中産の上の階級の学生で、誕生日のパーティーでしたが、私は招かれて参加しました。私が広間に入ると、学生の一人が、「あなたですね、UNAMできょう、ヘルメットのことで警察とやり合っていたのは」と言ったのです。その場にはUNAM、私立イベロアメリカ大学などの学生が十数人いたのですが、集会時の外国人記者絡みの出来事が伝わっていたのです。これには驚きましたが、そのくらい学生たちは真剣に事態の

動きを細かいことまで把握していたのです。彼らの伝達網には感心しました。パソコン、スマホ、携帯電話のない時代のことです。

▼アンガージュマン

状況はどんどん悪化し緊迫していきます。当時、メキシコにオクタビオ・パスという詩人がいました。在日メキシコ大使館勤務時代に芭蕉の俳句に感銘を受け『奥の細道』をスペイン語に翻訳した人です。ノーベル文学賞を1990年にもらうことになるのですが、当時はインド駐在大使でした。カルロス・フエンテスというセルバンテス賞をもらうことになる作家もいました。この2人が当時のメキシコ文学界の双璧でした。

パスは一時帰国し事態を見守っていましたが、フエンテスはパスを自宅に招き、内外記者団を前に会見を開いていました。保守のパス、革新のフエンテスというのが通り相場でしたが、2人は学生と権力の対決を深刻な危機と捉え、個人的確執を離れ、メキシコを代表する知識人として学生をはじめとする市民に連帯していたのです。パスには『孤独の迷宮』という名著がありますが、その中で混血国民の特質が分析されています。「彼らの体内に潜む残虐さ」が流血の惨事に繋がらないか、とパスは予知していたのかも知れません。

連日の闘争で流血が次第にひどくなりつつあった状況に心を痛めた2人は、対話による解決を訴えました。庶民と変わらない最も月並みな発言でしたが、これしかなかったのです。パスは、これからお話しする「トラテロルコ事件」の後、大使を辞めました。2人ともに鬼籍に入っています。知識人としての責任を何とか果たそうと試みた兩人に、私は敬意を払います。PRI一党独裁体制下のあちこちで、このような「一輪の民主の花」がちらほらと咲いていたはずですが。

知識人や芸術家の政治状況への関与を「アンガージュマン」と言いますが、この言葉を定着させたジャンポール・サルトルは「パリ五月革命」時、学生指導者と対話しました。フランスの学生はサルトルら知識人に影響されて蜂起したのではなく、自発的に立ち上がったのです。メキシコでも同じです。知識人は状況参加しても、学生や労働者が大群衆となって洪水のように大通りを流れる状況の前では小さな存在と映ったものです。

▼独裁党の歴史

少し歴史の話をします。1917年憲法の制定後も戦火はくすぶり続け、革命の指導者から大統領になった政治家や革命家が次々に暗殺されました。中南部貧農派を代表する南部解放軍司令官エミリアーノ・サパタ、チウアウア州知事から憲政軍北部師団長になった人民派の将軍フランシスコ・ビーヤ、地主階級出身で革命初期の大統領フランシスコ・マデーロ、同階級出身で憲政軍最高司令官として1917年憲法を制定し大統領になったベヌスティアーノ・カランサ、憲政軍北部軍団長から大統領になった将軍アルバロ・オブregonと、相次いで殺されました。

オブregonの政敵ブルタルコ＝エリーアス・カイエス大統領の時期に、憲法で権限・資産を失ったカトリック教会と信徒が決起する「クリステロスの乱」が起きました。2年続き、凄まじい殺戮がありました。この事件を基に英国人作家グレーム・グリーンは小説『権力と栄光』を書いています。

次のエミリオ・ポルテス＝ヒル大統領は1929年、革命国民党(PNR)を結党します。革命後も続いていた動乱に終止符を打ち、平和裡に国家建設を図るため強力な翼賛政党が必要になった

からです。1917年のロシア革命後、社会主義、共産主義の影響が全世界に広がっていましたが、メキシコは社会主義的政策を取り入れながら民族主義路線を確立しようと努めたのです。

1934年から1940年まで政権にあったラサロ・カルデナス大統領の時代は、日本軍は中国大陸に深入りしつつありましたが、スペインでは内戦がありました。内戦に続いて勃発したのが第2次世界大戦でした。カルデナス大統領は、1937年に外資所有の鉄道を国有化し、翌38年には米蘭英資本の石油産業を国有化しました。その結果、ペメックスという国営石油会社ができました。

1939年には、保守勢力やカトリック勢力が、メキシコ革命中興の指導者カルデナスの政策に反対するための国民行動党（PAN）を結党しました。

カルデナス時代は進歩的で、スターリンに追われたトロツキーを迎え入れました。トロツキーも3年後には、スターリンの放った殺し屋によって暗殺されてしまいます。カルデナスは、日本の官憲から左翼として追い回されていた佐野碩という有名な演劇の演出家も亡命者として受け入れました。

佐野碩はソ連で学んだ演劇理論を基に編み出した作風を植え付け、「メキシコ近代演劇の父」と呼ばれます。その名声と作風はメキシコからアルゼンチンまでラ米諸国に伝わりました。スペイン内戦で敗れた共和派の知識人らさまざまな階層の亡命者を受け入れたのもカルデナスです。スペイン人亡命者は、大学院大学コレヒオ・デ・メヒコを建学しました。

カルデナスは1938年、政権党PNRをメキシコ革命党（PRM）に改組・改名しました。1940年にマヌエル・アビラ＝カマチョ大統領の政権が発足します。第2次大戦期だったため、カルデナスは国防相と陸軍司令官に就任します。カルデナスはメキシコ革命を戦った経験を持つ將軍であり、戦時ゆえに異例の閣僚就任となったわけです。

アビラ＝カマチョ政権は対米協調主義で開発独裁路線をとります。この路線は以後、ディアス＝オルダース政権まで30年間続きます。アビラ＝カマチョ大統領は1946年、政権党PRMを今日まで続く「制度的革命党」（PRI）に改組・改名し、国内のあらゆる階層を取り込む翼賛体制を完成させました。

一党支配という「政治の安定」の下で経済開発を急ぎ、経済成長率は年率6%を記録し、メキシコは第3世界の優等国となり、1968年に五輪を開催するまでに至りました。ただし貧富格差と腐敗がひどく、貧しい大きな部分と豊かな小さな部分が共存する「二つのメキシコ」と呼ばれる状況に陥ったわけです。

▼賞味期限切れ

それでも経済が発展すれば人々は政治面での自由を求めます。取り残された貧しい人々は不満を募らせ、政治的に目覚めます。農村の若い人はとくに、経済発展によって社会の流動性が高まるため、都市へと移動します。農業が大部分だった経済構造の変化が都市化を促進します。都市に集まった若者の多くは農村出身でしたが、選良意識を持つ大学生として世の中の動きに敏感になります。過去の価値観や権威を否定するヒッピー時代には、なおさら解放を求めます。

ところが政治的自由を求めれば、陳腐なPRIが全土を覆い、頭打ちの状態です。革命は遠い過去なのに、PRIは「革命を制度化して実行し続ける」と空しく言い続けながら、巨大な貧困塊を無くす解決法を持たず、その気もない。大学生らは、PRIを「滅びるべきなのに滅びない恐竜」

に見立て、その体制に反逆することで、政治的自由の乏しい開発独裁の限界を示そうとしたのです。カリブ海越しの隣国キューバは社会主義革命を実践していました。「制度的革命」は嘘っぱちだと、誰もがはっきりと気づいていたのです。

PRI体制は賞味期限切れ、消費期限切れでした。しかし当時は報道・言論の自由がほとんどありませんでした。政府をあからさまに批判すれば、記者や編集者が捕らえられ、暗殺されることもありました。その結果、新聞は「政府に売られた新聞」、「政府から買われた新聞」などと呼ばれていました。

私たち外国メディアの駐在記者は、メキシコのジャーナリストの地位が低いため、社会的には低く見られていました。新聞が真実を伝えないから馬鹿にされ、若者は新聞が真実を伝えないから一層怒ります。

▼造反有理

発展途上社会では大学生は選良ですが、PRI体制に忠実で世事に長けていればエリートになり得ますが、そうでなければ頭打ちですね。UNAMや工科大学はマンモス大学です。体制に忠実な学生のすべてが選良になれるわけがありません。そんな状況を打ち壊したいと思えば反逆するしかないでしょう。

当時、中国では毛沢東の大号令の下、「文化大革命」が進行していました。毛は「造反有理」（反逆には正当性がある）を説き、若者は物につかれたように反逆していました。巨大な下克上革命が展開され、国際社会に影響を及ぼしていました。そこに「パリ五月革命」が起き、その波が大西洋越しに伝わって来ました。

開発独裁政権は「繁栄」と引き換えに国民に服従を要求します。管理対被管理の関係が明確に現れます。五輪開催も開発独裁が「発展」を誇示するための一大フェスティバルでした。五輪をラ米で最初に開くことはメキシコにとってこの上ない誇りでした。五輪に先立ち長期間、「文化五輪」が催され、日本の能・狂言、日本映画祭、日本人演奏家のコンサートなどもありました。

2番目のラ米五輪開催国は48年ぶり、2016年のブラジルでした。リオデジャネイロ五輪です。今から半世紀前に発展途上のメキシコが五輪を開催するのは大変な背伸びで、もの凄い大事業でした。政府は、世界最大の祭である五輪が開催できるまでに「発展したメキシコ」を国際社会に見てもらいたい、評価されたいと必死でした。

学生は逆に、要求が受け入れられなければ五輪を開かせないと、暗黙の圧力を政府にかけていました。その要求は、弾圧をやめさせるための警察長官更迭と機動隊解散、対話受け入れ、大学からの権力撤退など6項目でした。状況は難しい局面に入っていきます。

▼赤と黒の旗

1968年9月が来ました。翌月にはメキシコ五輪が開かれます。当時のグスタボ・ディアス＝オルダース大統領は、プエブラというメキシコ市の近隣州出身の弁護士で、若い頃からとても厳しく育てられ、治安と社会秩序の維持を政治家の最大の使命と心得ていました。こういう考えを持つ政治家は少なくはないんですが、彼はそういう型の人物でした。だから人権や民主よりも何よりも治安が大切で、それが乱れるのが許せなかったのです。

メキシコ社会の秩序を守り、「平和」の下に繁栄を築いていく。これが彼のモットーでした。

「開発独裁」ですね。内相を経て大統領になりましたが、内相のころから米政府の諜報機関である中央情報局（CIA）の協力者でした。親米・反共・保守の鷹派です。

メキシコ市では一般市民多数も参加した「沈黙の行進」という大行進がありました。昼も夜もどこかしらで反政府行動があり、私たち報道陣も眠る暇がないほどでした。一方で五輪開催が迫っていましたから、取材態勢を整えるための準備作業にも追われていました。

開会式は、UNAM周辺の溶岩台地にある国立競技場で挙行されます。選手村も記者村も一帯にあります。私たちはK通信本社の運動部、写真部、社会部から来た特派員団、通信網を設置する技術部員や経理を担う財務部員、さらに通訳もいて、総勢約50人です。

9月のある日、ソカロ（憲法広場）に面したメキシコカトリックの本山である大聖堂の屋根の真ん中にある国旗掲揚場に学生が立ち入り、国旗を降ろし、別の旗を掲揚しました。何と、赤と黒の旗でした。赤は社会主義、労働運動。黒はアナーキズム（無政府主義）です。19世紀後半に広がったアナルコ・サンディカリズム（無政府主義-労働組合主義）の旗です。

これを掲げたのは学生側には致命的だった、と後に分析されました。治安重視のディアス＝オルダース大統領を激怒させたからだ。緊迫度は急速に増し、後戻りできない状況に突き進みます。事態の悪化は止まらず、坂道を転がるように悲劇に向かって急傾斜していきました。

▼トラテロルコの惨劇

10月2日が来ました。私は記者村にいましたが、提携するロイター通信から「トラテロルコが緊迫している。現場に急行しろ」とメッセージが届きました。K通信とロイター通信は全世界規模で持ちつ持たれつの協力関係を維持していますから、「友情の耳打ち」はよくあることです。この一報を受けて鈴木支局長と私に加え、学生時代にラグビー選手だった運動部の藤島勇一記者が志願し、3人で首都外周自動車道を突っ走りました。

メキシコ市中心部を少し離れたトラテロルコの中心にある広場には、アステカ神殿跡、その神殿を破壊して建てられたカトリック教会、周囲にある団地と外務省ビルの現代建築が並んでいます。それぞれ先住民、スペイン植民地、現代の三つの時代の文化を象徴することから、「三文化広場」と呼ばれています。

そこに学生たちは集結しました。大学ストライキ、集会、デモ行進から成る抗議行動を続けるかどうか、継続ならば同じ要求をし続けるのか、などを議論し決議するためでした。

団地の一つでチウアウア館と名付けられた建物は広場に面しています。その3階の通路の中央に学生指導部が陣取り、広場を埋めた仲間たちに向かって演説していました。それが終わるや、ヘリコプターが広場上空に飛来し、照明弾を落としました。夕暮れ前の薄暮の空が数瞬、明るくなります。

それが合図でした。大統領の命令を受けた大統領親衛隊、陸軍降下部隊、陸軍と警察の混成私服五輪部隊、所属不明だが政府側であるのが疑いない狙撃手たちが広場一帯に配置されていましたが、五輪部隊と狙撃手たちが広場の学生たちに向けて銃撃を開始したのです。たちまち死傷者が出て、広場は大混乱に陥り、学生たちは逃げ惑いました。3階にいた指導部の学生たちは五輪部隊から一網打尽にされ、どこかへ連行されました。

私たち3人が到着したのは、最初の照明弾が投下されてから少し経った頃で、あちこちで自動

小銃の激しい連射音やライフル銃の射撃音が鳴り響いていました。警官隊が広場を遠巻きにして通行禁止のテープを張っていました。私たちは取材証を提示し、非常線を通り、射撃音が最も激しいチウアウア館の裏側に行きました。同館には、その裏側に面した道路と広場を結ぶ自動車用の通路が開かれています。照明弾が光るたびに、修羅場と化した広場の様子がすぐそこに見えるのです。

▼人間的羽交い締め

私たち3人は縦一列になり建物の壁に沿いつつ、自動車用通路に向かって歩きだしました。同館の住民たちが、その通路から離れた所に固まって、通路から広場の様子を見ていました。皆、極度に怯え、苦悩するような心配顔で緊張していました。彼らの前を通り過ぎようとしたときです。一人の体格の良い中年女性が飛び出してきた、私を羽交い締めにしたのです。

「ホーベン（お若い）、死に行くのは止めなさい。私にはあなたのような息子がいます。あなたの母親のことを思うと、あなたをこのまま、あそこへ行かせるわけにはいきません」。そう涙声で言うのです。私は25歳、確かに若者でした。

「ありがとうございます。息子を持つ母親であるあなたにこうして止めていただいたことに感激し、感謝します。しかし職務として取材しなければなりません」。私がそう応じると、彼女は私を自由にしてくれ、「幸運を！」と言ってくれました。住民は皆、私たち3人を憐れむような顔で見守っていました。

私は、このメキシコ人女性が示した普遍的な人間的言動に痛く心を打たれました。半世紀経っても、そのことをこうして語っています。あのときの情景は鮮明に記憶しています。

しかし私たち3人は、自動車用通路を広場に出ることなく横切らねばなりません。通路の幅は7、8メートルないし10メートルぐらいだったでしょうか。その通路は、包囲されている学生らが広場から道路に脱出する通路でもあり、通路の広場側出入口では自動小銃による連射が繰り返されていました。

私たちは銃撃と銃撃の間合いを慎重に計り、靴の紐を結び直し、1回10秒近く続く連射が終わった瞬間、全速力で走り、通路を渡りきりました。その、渡りきるか否かの瞬間、私たちが走り動いたのを察知したのか、新たな連射がありました。

私たちは命拾いしたのかどうか、今もわかりません。しかし危険な状況にあったのは確かです。私は羽交い締めにしてくれた女性にあらためて感謝しました。彼女は30メートルぐらい離れた先刻の場所で私たちを見守っていました。私は手を振り、頭を下げました。彼女と周囲の住民たちは手を振り返してくれました。心は伝わりました。

この「冒険」も取材でした。このような場合、無事であれば全て良しとなるのでした。K通信社員・通信員の属性は埋没し、ジャーナリストとして自主的に判断した行動の結果でした。

その日、深夜、私は記者村に戻らず、首都中心部にある自宅のアパートに帰りました。トラテロルコの虐殺事件を追及取材するには都心にいなければならなかったからです。

▼白昼夢

政府は、メキシコ市の清掃職員を総動員し徹夜で、三文化広場の惨劇の痕跡を見事に消し去りました。ところどころに弾痕やかすかな痕跡が残っていましたが、前夜の事件発生を知らない者

は、何の変哲もない、いつもの広場を見たことでしょう。

翌10月3日の朝刊、昼刊、夕刊各紙を見ると、三文化広場での死者は「30人未満」と極めて少ないのです。集結し群衆化していた学生の数の多さ、長時間続いた激しい銃撃から推し量れば、何百人もの死者が出て不思議ではなかったのです。

政府の言論統制に縛られない私たち外国人記者の間では「最低400人説」が出回りました。病院、死体置き場（モルグ）、生き延びた学生、大学教授、近隣住民などからの情報を総合した結果です。

逮捕された学生指導部や広場で拘禁された活動家は軍用トラックで、市内のチャプルテペック公園の一角にある陸軍首都守備隊が駐屯する第1基地に連行され、拷問され自白を強要されました。「逮捕者は千数百人」と公表されましたが、「死者約30人」というのが依然、解せないのです。今日まで正確な死者数は公表されていません。

メキシコ市に既に滞在していたアヴェリー・ブランデー会長らIOC（国際オリンピック委員会）委員たちは2日夜から3日未明にかけ、緊急会議を開き、事態の重大さに鑑み、メキシコ五輪開催の中止も含め、政府に対応を求めました。

しかしディアス＝オルダース政権は断固開催すると回答しました。五輪開催のため敢えてトラテロルコの荒療治をしたのですから。

事件から10日後の10月12日、五輪開会式が挙行されました。組織委員長ペドロ・ラミーレス＝バスケスは、放たれた無数の鳩が上空を飛び交うのも見やりながら、「この平和な空の下で五輪が開かれる」と言っていたのです。シュールレアリスムでした。これほど空しい言葉を聞いたことはありません。いまだに白昼夢だったような気がしています。

以後半月、メキシコは五輪に熱狂し、学生運動とトラテロルコ事件の記憶は過去に埋没しました。私も特派員団とともに五輪取材にかかりっきりになりました。4年前の東京五輪時、学生だった私は、ある新聞社の五輪取材本部で種目別競技記録を整理するアルバイトをしていました。その思い出が脳裡にかすかに浮かんでいました。

▼エレナ・ポニアトウスカ

メキシコの著名な知識人にエレナ・ポニアトウスカという作家がいます。私が手にしているこの『トラテロルコの夜』を書いた人です。この本は、たまたま友人が持ってきてくれたのですが、惨劇を証言で再現した労作で、世界的に有名な本です。ポーランド系メキシコ人の彼女は当時、日刊紙の記者でした。しかし臨月でした。

三文化広場での事件発生の一報は新聞社から、自宅静養中の彼女に届きました。彼女は現場に急行しようとしたのですが、家族と医師に止められ、思い留まりました。しかし翌日、護衛役の家族や友人らと現場に行き、聞き書き取材を開始したのです。

その後、無事出産しますが、引き続き政府上層部から住民までありとあらゆる当事者、観察者へのインタビューを重ねます。その厳しい取材が結実したのがこの証言集です。トラテロルコ事件の実態と意味をもっと知りたい人は、この本を是非読んでください。

エレナは現在86歳で健在です。2013年にはセルバンテス賞を受賞しました。そのとき、「尊敬するカルロス・フエンテスと同じ賞をもらった」と喜んでいました。私は1999年にメキシコ

市の自宅にエレナを訪ねインタビューし、31年経っていたトラテロルコ事件やメキシコ情勢について語り合いました。

その1年後でしたか、来日した折、私は浅草のお好み焼き屋に彼女を案内し、語り合いました。エレナは、後述するサパティスタ蜂起、文学活動、ジャーナリズムなどについて大いに語りました。

▼エチェベリーア政権

ディアス＝オルダース大統領は任期切れ1年前の施政報告演説で、1968年の学生運動で死傷者が出たこと、とりわけトラテロルコ事件の責任は「私一人にある」と明言しました。これによって直系の部下であるルイス・エチェベリーア内相以下、関係した国家公務員、首都公務員、とくに軍・警察幹部らが「免罪」されました。演説の場、国会下院は拍手に包まれ、それがしばらく鳴り止みませんでした。

弾圧に関与した人々はさぞ、ほっとしたことでしょう。ラ米諸国に跋扈する悪しき慣習である「インプニダー」(無処罰)が、ここでも威力を発揮したのです。大統領自身も「責任」の言葉を公言したことで、自らを免罪したのです。

大統領が全責任を被ったことが禊ぎとなり、第2の責任者であるエチェベリーア内相は1970年の大統領選挙で難無く当選し、12月政権に就きました。ディアス＝オルダースは後に死の床で友人にトラテロルコ事件について問われ、「自分の好きなことばかりやっていたら人などいないんだよ」と答えました。つまり、あの選択は大統領としてやむをえなかった、と言いたかったのでしょう。

新大統領エチェベリーアはトラテロルコ事件の責任を内外で問われるのを覚悟しており、そうならないよう先手を打ちました。緊密な関係にあった壁画家ダビー・アルファロ＝シケイロスの提言も容れて、PRI体制の改革に着手します。

その柱が、文革の中国に学んだ「百花齊放・百家争鳴」でした。花が咲き乱れるように、いろいろな人がいろいろなことを言う、これぞ自由だ。毛沢東は、自由に意見を言わせておいて、本音をしゃべった人々を後で捕まえました。

しかし多数の人々が多様な意見を表明すれば、社会は流動的になります。メキシコの報道・言論の統制もかなり緩やかになったという印象でした。一方で左翼ゲリラが台頭しました。

▼血の木曜日事件

私たち外国人記者も仕事がしやすくなりました。エチェベリーア大統領は、プレスは統制するよりも懐柔する方が政権に役立つことを知っていました。記者会見をしばしば開き、国内視察に私たちを頻繁に招くようになりました。政権と政策の透明性が増し、政界に新風が吹き、大統領への評価は高まりました。

ところが1971年6月10日、メキシコ市北部の通称カスコ・デ・サントトマスという地区から学生が政府に抗議するデモ行進を開始したところ、「アルコネス」(鷹軍団)と呼ばれる武装した市の清掃職員が殴り込み、デモの先頭にいた活動家らを殺し始めたのです。私はデモ隊の先頭でロイター通信記者と取材していましたが、隊列が前方の大通りを左に曲がるのがわかったため、私たちは、その手前の道を迂回し、先回りして先頭を迎えようと決め、大通りに出ました。

その時です。数台のバスが到着し、大通りを塞ぎ、バスから飛び出してきた「アルコネス」が大通りを進みはじめたデモ隊を急襲したのです。私たちの頭上を銃弾が飛び、慌てて身を伏せました。この事件では数十人の死傷者が出ました。その日は木曜日で、「コルプス・クリスティ」（キリスト聖体節）でした。内外の新聞は「聖体節事件」と命名しました。私は日本人にわかりやすいように「血の木曜日事件」と呼びました。

翌日、大統領はソカロに面した政庁に内外記者団を招き、市当局を糾弾し、殺傷事件の責任をメキシコ市政府に負わせました。大統領は事件を、PRI党内の政敵を追放するのに利用したのです。しかし内外世論は、トラテロルコの歴史が繰り返されたと受け止めたのです。

▼経済権利義務憲章

アカプルコのあるゲレロ州をはじめ山岳地帯では、左翼ゲリラが軍、大地主、その手先の警官らと断続的に戦っていました。麻薬組織も、腐敗した軍・警察に守られて暗躍していました。「二つのメキシコ」に起因するありとあらゆる矛盾が一斉に社会の表面に現れたのでした。

エチェベリーアは、内なる矛盾は貧困問題に根差し、それは世界の貧困問題に繋がり、さらに第1世界（工業先進諸国）と開発途上の第3世界諸国の間の格差に根差すと見なしていました。第2世界（ソ連圏社会主義諸国）は第1、第3両世界の間にあって、発展段階も両世界の中間にあると位置づけられていました。

大統領は、サルバドール・アジェンデ時代にチリのサンティアゴで開かれた国連貿易開発会議（UNCTAD）首脳会議で、世界の国々の間に横たわる巨大な貧富格差を解消するための糸口として「諸国家の経済権利義務憲章」を提唱しました。その後、国連総会で採択され、「憲章」は公式な国連文書となりました。

エチェベリーアは、この外交成果を掲げ、第3世界の指導者を自認し、大統領任期が切れた直後の1976年12月に実施された国連事務総長選挙に出馬しました。しかし、2期目を目指していたオーストリア人の現役事務総長クルト・ワルトハイムに敗れました。結局、トラテロルコ事件や「血の木曜日事件」が祟ったのです。権謀術数政治家エチェベリーアの野心は、こうして潰えました。

▼元大統領の認識

余談ですが、私は1999年にエチェベリーア元大統領を広大な邸宅に訪ね、インタビューしました。邸宅の四隅には見張り台があり、銃と双眼鏡を持った護衛たちが四方を警戒していました。命を狙う政敵が少なからずいたのでしょう。

何とエチェベリーアは会議室にかつての部下だった閣僚らを勢揃いさせて、私を迎えました。いまだに影響力を維持しているという印象を私に与えたかったのでしょうか。当時77歳だったエチェベリーアは、国連公認の「第三世界経済社会研究所」を主宰し、その研究所を自邸に置いていました。私は真っ先にトラテロルコ事件について質問しました。

「当時は東西冷戦の真直中にあり、若者たちはメキシコで革命が可能だと考え、政権転覆を狙っていた」。元大統領は、そう前置きしてから、「軍隊の治安出動は大統領の専管事項だ」と強調しました。上司だった故ディアス＝オルダース大統領に全責任があるという考えを示したのです。居並ぶ部下たちは、一斉に肯く仕草を見せました。

このインタビューの日は6月10日木曜日で、奇しくも「血の木曜日事件」の28周年記念日でした。エチェベリアは「あの事件では誰も死ななかった」と偽りの認識を示し、その上で「当時のメキシコ市長に責任があった」と言い、最高指導者だった自身の責任には全く言及しませんでした。

このインタビューの内容をもっと紹介したいのですが、長くなるので、これで止めます。

▼新自由主義

エチェベリアは民族主義者を自認し、メキシコの独自性を守らねばならないという立場でしたが、次の大統領ホセ・ロベス＝ポルティエーヨも同じ路線でした。ディアス＝オルダース政権まで30年続いた親米・開発独裁路線と異なり、第3世界と連繋してメキシコの国益を追求する路線でした。しかしロベス＝ポルティエーヨ政権末期、累積対外債務返済が行き詰まり、通貨ペソが暴落し、国庫は破綻しました。

その後を受けたミゲル・デラマドリー大統領は、開発独裁に新自由主義を加味しました。国家の経済規制を最小限にし、経済を市場に任せる新自由主義は弱肉強食主義です。資本家ら豊かな者が生産、商業の拡大を通じて経済のパイを膨らませ、その分配によって貧しい者も豊かになるという理論です。これが1982年に導入されました。

その次の1988年に登場したのはカルロス・サリーナス大統領ですが、この人は選挙で実際には負けながら、開票の不正工作で当選したと見なされています。敗因は、その前のデラマドリー政権が新自由主義に突き進んだため、貧富格差が激しくなり、政権を支えていたPRIの翼賛協同体制が崩れてしまったからです。分配が増えず一層貧しくなった労農階層は、もはや保護してくれなくなったPRIの翼賛体制から離脱したのです。

それまで大統領選挙はPRI候補が当選するのが当たり前でしたが、そうではなくなり、不正工作によって当選するしかなくなったのです。経済を握る富裕層はサリーナスにかけていました。新自由主義政策を加速させ、国有資産の多くを民営化させ、経済支配を一気に強化したいと狙っていたからです。

そのころ北の米加両大国は「北米自由貿易地域」を創るため、自由貿易協定を結ぼうとしていました。サリーナスはこれに飛び付き、「第3世界から一気に第1世界にのし上がろう」を掛け声に、米加墨3国の自由貿易協定（TLCAN、英語ではNAFTA）調印を目指し、「国内整備」のため新自由主義政策に拍車をかけました。労農階層はさらに保護を失い、困窮化してゆきます。

新自由主義体制では、とくに金融資本が国境を超越して経済を支配するようになります。生産と商業という、財を作って売る伝統的な目に見える経済ではなくなってゆくのです。

▼憲法骨抜き

サリーナス大統領は、3国協定締結後、米加両国の大農式で生産される農作物によってメキシコ農業市場の大部分は凌駕されてしまうと見越し、大農場や大工業団地建設のため、貧農の土地所有を保障した1917年憲法を手直ししました。禁止されていた小作農らの土地は売買可能となり、アグアカテ（アボカド）、トマト、柑橘類、食用ノバル（団扇サボテンの葉）、大麦（ビール生産用）など両国に太刀打ちできる商品作物が大農式で生産されることとなります。

先住民をはじめ貧農は、メキシコ革命の最大の遺産だった耕作地と入会地の使用権が脅かされ、

土地を離れた農民は都市スラムの住民、米国への不法移民、麻薬マフィア要員などになるしか生きる術がなくなります。暴力産業、地下産業の元締めである麻薬マフィアが1990年代から今日まで「隆盛」を極めている理由の一つは、新自由主義により貧困塊が膨らんだ結果です。

1917年憲法はメキシコ民族主義が体現されたものですが、サリーナスは米国と共存共栄をせねばならないとの観点から、歴史教科書の「反米民族主義」的記述を弱めたり削除したりする「教育改革」も厭いませんでした。

この国の「反米・嫌米主義」は、19世紀半ばの「米墨戦争」でメキシコがスペインから受け継いだ国土の北半分を失った史実に根差すところが大いなのですが、そのような歴史的国民意識を和らげようと図ったのです。しかし教員や知識人から「改竄」と非難され、政府の意図は必ずしも成功しませんでした。

教会も資産を保有できるようになりました。教会に一種の法人資格を認め、資産を持てるようにしたのです。教会は一定の社会的な発言権を持つようになりました。先刻触れた1939年結党のPANは、革命や社会主義に反対する保守的なカトリック政党です。国際社会ではロシア革命に警戒する保守勢力が「キリスト教民主党」や「キリスト教社会党」を結党していましたが、革命を経験したメキシコでは保守色の強いPANが生まれたのでした。

サリーナスPRI政権は、改憲でカトリック教会の復権を果たし、その結果PANと連繫できるようになりました。PANはモンテレイ財閥をはじめ米国に近い北部および中部の財界や大地主の支持を受けています。PRIの新自由主義に大賛成です。このことは富裕層・財界にPRIとPANのいずれの政府でも良いという選択肢を与えました。

その力学により、2000年の大統領選挙で初のPAN政権（ビセンテ・フォックス大統領）が生まれることとなります。フォックスはドイツ人移民の息子で、メキシコ・コココーラ社の社長や米コココーラ社ラ米総支配人を務めた富裕な政治家です。

▼プリアナルコ体制

メキシコ政界に、もう一つの重要な要素が組み込まれます。コカイン最大生産国コロンビアで1980年代末から90年代半ばまで米政府肝煎りの「麻薬戦争」が展開されたため、麻薬マフィアの最大拠点がコロンビアからメキシコに移りました。

メキシコは大麻とヘロインの大生産国であり、中国や台湾から化学原料を密輸入し合成麻薬も生産し、コロンビアなど南米アンデス諸国から運ばれるコカインを含め一大麻薬生産・密輸基地となったのです。

3200キロの国境で米国と地続きのメキシコには大きな地の利があります。米国が世界最大の麻薬消費市場だからです。米墨両国の地下世界は麻薬利権で結びついています。米国からは巨額の麻薬代金とともに、自由に買える高性能の銃器類が大量にメキシコの麻薬マフィアに流れています。

マフィアはメキシコ陸軍特殊部隊の兵士や射撃の上手な警官を引き抜いて、用心棒や武闘要員として高給で雇っています。運び屋や殺し屋の役割は、農村からあふれてくる失業者が担います。失業者は危険と背中合わせのマフィアの底辺で働くのですが、実入りがいいため敢えて犯罪産業の底辺を担っているのです。

麻薬は貧者に巨万の富をもたらします。メキシコには強力なマフィアが10近くあり、流血の縄張り争いをしながら、政府と組んだり政府を敵に回したりして鎬を削っています。マフィアにとって最重要事はメキシコ当局の取締りから外れることで、そのため脅迫と巨額の資金で官憲を買収し、暗黙の協力者に仕立てます。汚れた麻薬資金ですが、ひとたび投資され不動産や株に化ければ汚れの痕跡はなくなります。これが「資金洗浄」ですね。

少し話を転じますが、1980年代半ばボリビアのビクトル・パス＝エステンソロ大統領の政権は、超インフレに苦しんでいました、解決策として、デノミネーションに踏み切りました。何桁もならんでいたたくさんのゼロを取り払い、新しい通貨ボリビアーノにしたのですが、それを国際的に支える外貨がなければ、すぐにインフレが復活します。ところが国庫は底をついていました。同大統領が苦肉の策として使ったのは、ボリビアのコカインマフィアから提供された麻薬資金だったのです。

サリーナスは、このボリビアの例を横目に、米加墨3国自由貿易協定ができる前に、強力な大企業や財閥をつくろうと考え、政権に協力的な麻薬マフィアの闇資金を吸い上げ、「経済体質強化」のため表経済に注入しました。国策としての資金洗浄です。財閥は国营企業の払い下げも受け、肥大化します。

この過程で、PRI・PAN・NARCOが結びついたという意味で「PRIANARCO」(プリアナルコ)体制が形成されました。この体制づくりで暗躍したのは、大統領の実兄で、麻薬取引に関与していたラウル・サリーナスと目されています。

この「地下体制」に邪魔な人物は暗殺されました。枢機卿・グアダラハラ大司教ファン＝ヘスス・ボサダス(1993年5月24日、グアダラハラ空港で)、PRI大統領候補ルイス＝ドナルド・コロシオ(1994年3月23日、ティファーナ市周辺部で)、PRI書記長ホセ＝フランシスコ・ルイス＝マシエウ(同年9月28日、メキシコ市中心街で)が相次いで殺されたのです。

これらの「マグニシディオ」(大物暗殺)事件の背後には、サリーナス兄弟の影がちらついていました。とくに書記長暗殺ではラウルが黒幕として起訴され、10年間服役しました。ルイス＝マシエウはサリーナス兄弟の元義弟でした。

▼サパティスタの乱

一つ重要なことをつけ加えます。1994年元日にTLCAN／NAFTAが発効したのに合わせてチアパス州で、「サパティスタ民族解放軍」(EZLN)の武装蜂起がありました。北米3国市場発足に冷水を浴びせたのです。

私は直前の93年12月来日したサリーナス大統領に東京で2度会ったのですが、帝国ホテルの広間で開かれた在日メキシコ人との会合宴でサリーナスは靴を履いたままテーブルに上がって演説を始めました。「第3世界から一足飛びに第1世界に入るのだ!」と熱に浮かされたように繰り返していました。招かれて出席していた私は、サリーナスの常軌を逸した打ち込みぶりに、何か異様なものを感じていました。

メキシコ政治の在り方や新自由主義に反対し続け今も健在のEZLNは、革命で「貧農に土地を」と訴えて戦い、暗殺されたエミリアーノ・サパタの思想の流れを汲んでいます。私は1994年4月、チアパス州でEZLNを取材しましたが、これについて話せば長くなるので止めます。一言つけ加

えれば、EZLNの最高指導部は、トラテロルコ事件で終わった1968年の学生運動の流れを汲んでいます。

▼2大保守党体制の黄昏

2000年にフォックスPAN政権が生まれたことで、1929年以来2度改組改名しながら政権党であり続けたPRIは71年で野に下りました。滅びるべきなのに滅びない「恐竜」PRIの巨体がついに倒れたのです。多くのメキシコ人は、この政権交代を「民主化実現」と捉えて喜びました。

ですが同質性の高いPRIとPANの間の交代です。初代PAN政権は新自由主義を深化させ、貧富格差を維持・拡大させて、社会改革を期待していた有権者を幻滅させました。

2006年の大統領選挙では、第3政党PRD（民主革命党）のアンドレス＝マヌエル・ロペス＝オブラドール（AMLO）候補が勝利したはずでしたが、フォックス政権が開票時に不正工作しました。その結果、敗れたはずのフェリーペ・カルデロンPAN候補が勝つことになりました。

負けたのに勝ったサリーナスが北米自由貿易市場結成に全力を投入したように、カルデロンは汚名返上とばかり「麻薬戦争」を展開したのです。国中の治安が悪化し、死傷者、強制拉致者が激増し、麻薬社会は一層険悪化してしまいました。

2012年選挙では、PRIのエンリケ・ペニャ＝ニエト（EPN）が金権選挙でAMLOを振り切り、12年ぶりに政権を奪回しました。しかしEPN自ら派手に腐敗したうえ、2年目の2014年9月にアヨツィナパ事件（農村教員養成学校生多数の強制拉致事件）が発生しました。この事件に大統領指揮下にある陸軍部隊と連邦警察が関与し、麻薬マフィアが主犯だったことが明るみに出るなどで、政権の権勢は地に落ちました。

EPN政権は公式に認めなかったのですが、国家機関とマフィアとの癒着が証明されたのです。それに輪をかけたのが、ドナルド・トランプ米大統領です。EPNはトランプにさんざん馬鹿にされ、メキシコ人は恥辱にまみれました。EPNは任期最後の2年はレームダック化していました。麻薬関連犯罪も衰えませんでした。

▼AMLO圧勝

AMLOは「国家刷新運動」(MORENA)を結成し、今年2018年7月の大統領選挙に3度目の挑戦をし、3000万票を得て当選を果たしました。開票時の不正を不可能にするほどの圧勝でした。

南東部のタバスコ州に生まれたAMLOは、メキシコ自治大学（UNAM）で行政学と政治学を修め、同州に戻って先住民関係の仕事を行います。先住民ら貧しい人々への理解と共感が生まれます。

しかしタバスコ州での選挙には勝てず、世紀の変わり目にメキシコ市長の選挙に出て当選しました。5年間市長を続け、改革を進めて一躍、政治家として認められます。その名声と自信に支えられて大統領選挙に出馬し、3回目で勝ったわけです。

政権党となったMORENAの「モレナ」には「褐色の、褐色女」などの意味があります。メキシコ人の大多数がメスティーソ（混血）であることや、メキシコの混血の守護聖母グアダルーペにも繋がります。

決選投票制度のないメキシコ大統領選挙では従来、PRI、PAN、PRDの3候補が出馬し三つ巴の争いとなり、30～40%台の得票率で当選できたのですが、AMLOは過半数得票で文句なしに勝

利しました。PRIとPANの「プリアニスタ」体制に絶望していた人民大衆が大挙してAMLOを支持した結果です。現代メキシコの大統領選挙史上、初めて広範な市民の意思が反映されました。

AMLOは外交政策では、米加墨市場結成で「北米化」したことで失ったラ米での外交的影響力の回復、ベネズエラ敵視政策打ち切り、対米姿勢建て直しなど、内政では貧富格差緩和、新首都空港建設など公共事業計画見直し、汚職掃討、選挙と並べて国民投票など直接民主主義による政策決定重視、アヨツィナパ事件など重大事件の真相究明、国家警備隊編成による治安確保などを掲げています。

2018年12月1日にAMLO大統領が誕生します。「AMLOのメキシコ」をじっくり観察していきます。ご静聴、ありがとうございました。(AMLOは予定通り就任しました)

(いだか ひろあき 本研究所学外所員、ジャーナリスト)